

マタイによる福音書28章「王なるキリストの復活」

1A 復活の現れ 1-10

1B 御使いの証言 1-7

2B イエスご自身 8-10

2A 二つの知らせ 11-20

1B 買収による虚偽 11-15

2B 弟子たちに対する命令 16-20

本文

マタイによる福音書 28 章を開いてください。私たちはついに、四つの福音書の初め、マタイによる福音書の最後の章に入ります。イエス・キリストが死者の中から甦ること、復活することで、全ての福音書は終わります。キリストがよみがえり、今も生きておられ、また戻って来られるということに信じて、私たち教会は生き、それぞれのキリスト者は生きています。

それで復活にて福音書は終わるのですが、それぞれの著者が異なる証言をしています。少しずつ違います、けれどもそれは間違っているということではなく、むしろ、あまりにも証言が多くなり、それで情報が錯綜気味になっていると言ったらよいでしょうか。例えば、地下鉄サリン事件が1995年に起こりました、23年前の出来事ですが、マタイが福音書を書いたのも復活の出来事から20年後ぐらい、紀元後50年辺りと言われていています。ですから、似たような期間が経っていますが、その事件についての証言はあまりにも大きく、それぞれの人の話は情報がたくさんあって、他の証言者と照らし合わせると、一見、矛盾してるかのように見えるということがあると思います。四つの福音書も同じです。マタイが書き記した復活の出来事は、その一部です。そしてマタイがこの福音書の中で知らせたいイエス様のお姿があります。

1A 復活の現れ 1-10

1B 御使いの証言 1-7

1 さて、安息日が終わって週の初めの日の明け方、マグダラのマリアともう一人のマリアが墓を見に行った。

27 章では、アリマタヤのヨセフが十字架上で死なれたイエスの下げ渡しを願って、その願いをピラトが聞き、それでヨセフの用意していた新しい墓にイエス様を葬ったことが書かれていました。そしてマタイは、ユダヤ人指導者がダメ押しをして、ピラトに墓にローマ兵の番兵を付けるようお願いしている場面があります。彼らの、イエスを葬り去りたいという欲望は相当なもので、その執拗な様もマタイは描いていますが、それによってかえって、イエスの復活が確かに起こったということを明らかにしてしまいます。まず、ユダヤ人の墓は横穴式の、石灰岩の岩盤に掘られています。そし

て円形の石板でふさぎます。さらに、ローマ兵によって、たすきかけ状にロープを掛けて、何力所かに封印をしました。ろうを使用してローマの印が押されました。この封印が破られたら、今度はローマ兵が死刑になりますから、彼らも命がけです。これで、イエスが死んで、葬られたということは、何重も確認された事実となりました。

ところで、ユダヤ人は安息日には労働をしてはいけないという律法を与えられていました。また、そのまま木に死体をつるしておくことは、土地を汚すという律法もあるため、日が暮れる前にすぐに取り下ろす必要がありました。ローマ人たちは、そのまま死体を木の上に放置して、獣や鳥に食べさせますが、ユダヤ人たちはそうは行きません。それで、ローマ兵は他の二人の罪人は脛を追ってすみやかに殺しましたが、イエス様は既に死んでいたもので、折らなくてもよかったということが、ヨハネ 19 章に書いてあります。いずれにしても、安息日、しかも過越の祭りの時の安息日ですから、このことは絶対に行わなければいけなかったのですが、これが全て、イエス様の復活の備えになっています。確実に死に、そして葬られたのです。

それで、大急ぎで埋葬しました。ですから、まだきちんと埋葬を終えていませんでした。ユダヤ人は、洞窟中にいる遺体を安置します。そして一年ぐらいますと、腐乱して、骨だけになります。その骨を骨箱に入れて保管して墓にします。けれども、初め人の死を悼み悲しむ時は、その腐乱によって出て来る臭いを消すために、香料によって整えます。それをする時間がありませんでした。それで女たちが、安息日が終わった土曜の夜にすぐに、店にいった香料を買ったことでしょう。そして夜が明けた時に、まだ薄暗い時に墓のところに行き、ご遺体を世話をしようと思っていました。

来たのは女たちでした、「マгдаラのマリアともう一人のマリアが墓を見に行つた。」とあります。27 章 56 節で十字架に付けられたイエス様を遠くから見ついていた女たちの中にいます。それから、61 節にはこの二人が、死んだイエス様が墓に納められたのを確かに見えています。他にも女たちはいたのですが(ルカ 24:10)、マタイはこの二人に限定しています。ヨハネは、その中でもマгдаラのマリアが、たった独りで園の中で泣いていることを記しています。おそらく女たちと初めは動いていたのですが、独りだけ早歩きか、小走りになって墓にいったのではないかと思います。

2 すると見よ、大きな地震が起こつた。主の使いが天から降りて来て石をわきに転がし、その上に座つたからである。3 その姿は稲妻のようで、衣は雪のように白かつた。4 その恐ろしさに番兵たちは震え上がり、死人のようになった。

「大きな地震」が起こっています。十字架の上でイエス様が死なれた直後にも、大きな地震がありましたね。神が強く介入されている時に、大きな地震が起こっています。神を信ぜず敬まない者たちにとっては、神の怒り、神の裁きの現れでありましたが、27 章にありましたように、地震をきっかけにして聖徒たちの墓が開いて、後に復活して都の中に現れるきっかけとなります。同じ地震ですが、神を敬う者たちには救いとなっています。ゼカリヤ書 14 章には、主が到来されると、オリーブ

山が南北に裂けますが、残された者たちがその谷に逃げる事が書かれています。地震が起こりますが、それでも神を信じる残された人々がそのように生かされ、救われる様子があります。

そして、その地震と共に、「主の使いが天から降りて来て」とあります。覚えていますか、イエス様の生涯で、天使が強く関わる時がありました。そうです、処女懐妊を告げに来た時に、天使が来ました。また、ヨセフたちがヘロデの手から逃げなければいけないことも、神の使いが警告しました。神が人として現れた時に、天使が介在し、この方が確かに神の御子で、神ご自身なのだということを実証する時に、このように天使が介在しているのです。「石をわきに転がし、その上に座った」とありますが、これは、ローマの力をせせら笑うかのように、神の全能の力で押し潰していることを示していますし、そこに座っているのは、余裕をもって征服している姿であります。

天使についての描写は、神の栄光と清さを表しています。そして、神を知らない、神を認めない者たちには、それはあまりにも恐ろしい光景であり、死人のようになっています。似たようなことが、ダニエル書 10 章で起こっています。ティグリス川の岸を歩いていた時に、恐ろしいほど輝いている姿で現れた使いがおり、ダニエルに同行していた人々は、その姿は見なかったものの大きな恐怖に襲われ、「身を隠して逃げ去った」(10:7)とあります。そしてダニエル自身もひどく恐れて、立ち上がれなくなりますが、「特別に愛されている人ダニエルよ。恐れるな。」と呼びかけられて、なんとか立ち上がって、神からの言葉を聞くことができました。それと同じように、これから主からの使いが、女たちに話します。

5 御使いは女たちに言った。「あなたがたは、恐れることはありません。十字架につけられたイエスを捜しているのは分かっています。6 ここにはおられません。前から言っておられたとおり、よみがえられたのです。さあ、納められていた場所を見なさい。

御使いたちは、確かにイエス様が甦ったことを確認させています、納められていた場所を見なさいと促しています。彼女たちにとって、また弟子たちにとって、イエスという存在は既に死んでしまった人でありました。過去の存在でありました。しかし、今、ここにいない、甦られたのだと言います。

ここに、復活信仰の始まりがあります。それは、自分自身が、またこの世界がアダムの罪によって、自分自身も、また世界も死んでしまっていることを認めることです。自分のうちには良いものがなく、救われる可能性がないことを認めることです。しかし、それは同時にキリストの中に命がすべて隠されているのだということを知ることの一步です。この方が甦られた、だから私も生きているのだという希望です。そして世界もこの方によって全く新しくされる希望があるのだということです。

「前から言っておられたとおり」と御使いが言っていることにも注目してください、何度となくイエス様は、甦ることを語っておられました。殺されるけれども、三日目によみがえなければいけないと語っておられました(マタイ 16:21 等)主が語られていることは、まるで蜃気楼か、何か空想か、

想像をはるかに超えることだったので頭の中にさえ入っていなかったのです。けれども、その語られていたことこそが現実であり、事実であり、自分たちが思っていたこと、イエスは死んで、そのまま死んでしまったのだということのほうが虚実になります。私たちの罪の中の生活はこのように虚しいものであり、いつか滅びるものであり、けれども、イエスにある命は真実であり、いつまでも残るものです。

7 そして、急いで行って弟子たちに伝えなさい。『イエスは死人の中からよみがえられました。そして、あなたがたより先にガリラヤに行かれます。そこでお会いできます』と。いいですか、私は確かにあなたがたに伝えました。」

マタイによる福音書にある復活の記述の特徴は、ガリラヤに行きなさいとイエス様が言われたことを、思い起こさせているところにあります。他の福音書では、ヨハネが確かにガリラヤにいる弟子たちの姿を、またそこに現れたイエス様の姿を描いていますが、それはイエス様が命じられて、また御使いがこのようにイエス様からの指示を伝えているのは、マタイだけが記録しています。ここには、大きな目的があります。イエス様は、ガリラヤにおいて山上の垂訓を語られました。そこで天の御国に生きる者たちがどうなのかを宣言されました、心の貧しい者は幸いである、悲しむ者は幸いである、柔和な者は幸いである、と続く宣言です。そして、御国の中に生きるものが何をしなければいけないかを教えられました。

今や、甦りによって、確かに神の御子であり、王なるキリストであることが明らかにされた今、キリストの御国が始動するのだということです。

2B イエスご自身 8-10

8 彼女たちは恐ろしくはあったが大いに喜んで、急いで墓から立ち去り、弟子たちに知らせようと走って行った。

御使いに会ったことによる恐れが余韻として残っているのですが、イエスが甦られたという事実を受け入れて、そこには言葉に言い尽くすことのできない大いなる喜びが湧き出しました。ペテロは、こう言い表しました。「神は、ご自分の大きなあわれみのゆえに、イエス・キリストが死者の中からよみがえられたことによって、私たちを新しく生まれさせ、生ける望みを持たせてくださいました。・・・あなたがたはイエス・キリストを見たことはないけれども愛しており、今見てはいないけれども信じており、ことばに尽くせない、栄えに満ちた喜びに躍っています。(I ペテ 1:3,8) 」

この喜びの知らせを伝える姿が、イザヤ書に預言されています。「40:9 シオンに良い知らせを伝える者よ。高い山に登れ。エルサレムに良い知らせを伝える者よ、力の限り声をあげよ。声をあげよ。恐れるな。ユダの町々に言え。『見よ、あなたがたの神を。』」ここで伝えるという動詞が女性形になっています。女たちが伝えて行く姿です。箴言にも、知恵が女性化されていて、道端で伝えて

いる姿があります(8:1-11)。とかく、男は面子があるので、やるべきことをできないところがあります。十字架も見て、埋葬される場所もじっくり見て、そして墓が空であったことも初めに確認する、そして復活したイエス様に初めに会う、こういった最も大切な場面に真っ直ぐにいることのできるのが、女たちでした。

9 すると見よ、イエスが「おはよう」と言って彼女たちの前に現れた。彼女たちは近寄ってその足を抱き、イエスを拝した。

主ご自身が現れてくださいました！その言葉が、「おはよう」です。朝の挨拶にはふさわしいですね、他の訳では「平安あれ」「安かれ」であります。喜びなさいというニュアンスが込められた挨拶の言葉だそうです。女たちは、足を抱いて、イエス様を拝しました。これは、まさにイエス様を王として、また神の御子として拝んでいる姿であります。キリストが甦られた後の預言が、詩篇 2 篇にあります。そこで王たちが、子に口づけせよという命令があります(11 節)。これは、王たちが、まことの王であられるキリストを、神の御子として拝んでいる姿です。

10 イエスは言われた。「恐れることはありません。行って、わたしの兄弟たちに、ガリラヤに行くように言いなさい。そこでわたしに会えます。」

彼女たちが、畏怖で恐れを抱いていたところを、イエス様が「恐れることはありません」と励ましておられます。ものすごい権威者が表れて、初めは恐れおののいているけれども、とても気さくに、親愛の思いを込めて語りかけておられる感じです。

そして、弟子たちのことを「わたしの兄弟たち」と呼ばれています。主とそのしもべである関係のはずが、イエス様がここに至って彼らの事を兄弟と呼ばれています。どうしてか？弟子たちの霊的位置が、イエス様の復活によってバージョン・アップしたからです。ご自身がよみがえったら、あなたがたは喜びでみちあふれるようになる、と言われました(ヨハネ 16:24)。そして、こう言われます。「16:26-27 その日には、あなたがたはわたしの名によって求めます。あなたがたに代わってわたしが父に願う、と言うものではありません。父ご自身があなたがたを愛しておられるのです。あなたがたがわたしを愛し、わたしが神のもとから出て来たことを信じたからです。」イエス様が甦られたことによって、キリストにつく者たちは罪赦され、赦されただけでなく、キリストの義によって義と認められます。まったくの恵みによるものです。つまり、キリストが神の御子であります。キリストにあつて霊的に神の子どもにさせていただいたのです。キリストは神ご自身で、我々は人ですが、それでも御父と御子にある関係を、キリストにある者たちにも拡げてくださったのです。養子縁組にさせていただいたのです。だから、ロマ 8 章でパウロはこう言っています。「神は、あらかじめ知っている人たちを、御子のかたちと同じ姿にあらかじめ定められたのです。それは、多くの兄弟たちの中で御子が長子となるためです。(8:29)」ですから、キリストの甦りにあずかった者たちは、神によって生まれ、神の養子になり、そしてキリストが神の国を治められる時に、自分たちも共に

王となり、祭司となるのです。

改めてイエス様の復活の意義を考えてみますと、ロマ 4 章 25 節にはこう書いてあります。「主イエスは、私たちの背きの罪のゆえに死に渡され、私たちが義と認められるために、よみがえられました。」イエス様は無実な方でした、だから死刑に定められることは不正でありました。この正しい方が罪に定められたのです。けれども、この方は確かに正しいわけであり、その正しさが死者からの甦りによって証明されたのです。死刑に定められた人が冤罪によって、無実が晴らされることがあります、イエス様は死刑に定められて死んでしまったけれども、その正しさが甦りによって、死に打ち勝つことによって晴らされたのです。ゆえに、キリストに自分自身を任せ、信頼する者たちは、恵みによってこの方の義をもって義と認められるのです。そして義と認められているので、死んでもまた甦る希望も与えられています。

2A 二つの知らせ 11-20

こうして、女たちから弟子たちに復活の知らせが届き、そして弟子たちは既に先に行っているイエス様に会いに行くこととなります。マタイは次に、この喜ばしい知らせ、真実な知らせに対抗して、嘘の知らせを伝える勢力がいることを語っています。

1B 買収による虚偽 11-15

11 彼女たちが行き着かないうちに、番兵たちが何人か都に戻って、起こったことをすべて祭司長たちに報告した。

死人のように倒れてしまった番兵たちは起き上がることができたようです。「都に戻って」とありますが、十字架の処刑場ゴルゴダは、城壁の外にありましたから、戻ってきています。そして彼らは、生き残る道として自分の上司ではなく、祭司長たちのところに行っています！もし上司、総督ピラトに知られたら、自分たちが死刑ですから。そして、大事なのは、「彼女たちが行き着かないうちに」とあることです。先に嘘の情報が、真実な情報よりも先に広まっていったようです。

12 そこで祭司長たちは長老たちとともに集まって協議し、兵士たちに多額の金を与えて、13 こう言った。「『弟子たちが夜やって来て、われわれが眠っている間にイエスを盗んで行った』と言いなさい。14 もしこのことが総督の耳に入っても、私たちがうまく説得して、あなたがたには心配をかけないようにするから。」15 そこで、彼らは金をもらって、言われたとおりにした。それで、この話は今日までユダヤ人の間に広まっている。

マタイがこれを書いている、約 20 年後においても、遺体を盗み出したという説が広がっていたことをよく表しています。人というのは、とても弱いもので虚偽の知らせというものを見分けることができず、それを信じていることがしばしば起こり、嘘のほうをみな信じてしまっています。本当のことが後で伝わっても、逆にそれは信じがたいと思ってしまうのです。マーク・トゥウェインというアメ

リカの小説家が、このようなことを言いました。「真実がその靴を履き終える前に、嘘は世界の半分を既に駆け巡っている。」真実なことが伝わる前に、一気に虚報は広がって行くということです。

それにしても、真実な良き知らせは、イエス様の前でひれ伏す者たちによって広まっていますが、彼らのほうの嘘の知らせは、買収と汚い金によって広まっています。

2B 弟子たちに対する命令 16-20

そしてついに、弟子たちの耳に女たちの証言が伝わります。その後、彼らは自分たちの心の鈍さがどれほどのものであるか、打ちのめされるぐらいであります。ルカによる福音書、ヨハネによる福音書に、その理解の遅さ、鈍さが鮮やかに出ています。けれども、彼らはイエス様に会い、そしてガリラヤにも移動して、そこでもイエス様に会いに行きます。

16 さて、十一人の弟子たちはガリラヤに行き、イエスが指示された山に登った。17 そしてイエスに会って礼拝した。ただし、疑う者たちもいた。

ここで分かりますね、イエス様はかつて山の上で説教をされて、天の御国の福音を宣言されました。今、再びご自分が指示されたところに弟子たちが山に登って、そこで命令を受けるのです。山上の垂訓の話、その他のイエス様の教えは昔の教えではなくなったのです。イエスがガリラヤで行われたこと、語られたことは、そのまま生きているイエス様によって継続されるということです。そして、弟子たちは女たちと同じように、ひれ伏しています。そうです、キリストが王であられることを彼らはここで改めて認識しています。終わりの日に、主が再臨されて、人々がこのようにして主の前にひれ伏します。それまでの間、弟子たちはキリストの前に来て、ひれ伏すのです。

興味深いことに、「ただし、疑う者たちもいた。」という一言があります。ここに、聖書のリアルな姿があります。もし聖書がフェイクであれば、こんなことを決して書かないでしょう。敢えて信頼を落とすようなことを誰が書くでしょうか？けれども、これは私たちに慰めを与えますね。使徒たちは決して完全な人たちではなかったということです。肉の中に住む、弱き存在です。人間味のある人たちです。疑うこともします。目に前にイエス様がおられるのに、疑ってしまうような存在です。けれども、そのような彼らにイエス様が付き合っておられて、彼らに大きな宣教命令を与えられるのです。

18 イエスは近づいて来て、彼らにこう言われた。「わたしには天においても地においても、すべての権威が与えられています。19 ですから、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子とみなさい。父、子、聖霊の名において彼らにバプテスマを授け、20 わたしがあなたがたに命じておいた、すべてのことを守るように教えなさい。見よ。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいます。」

イエス様から、弟子たちに使命を与られます。イエス様が近づかれたというのは、彼らをご自

身の權威によって任命し、任務を与えられるからです。午前礼拝でお話しましたが、一つは、イエスはいつさいの權威を持っておられることです。十一人という小さな集団ですが、その小さき者たちが、世界の権力者や力ある者たちの思惑さえ押し潰す權威と力が与えられます。ダビデが、こう歌いました。「詩 8:1-2 【主】よ私たちの主よあなたの御名は全地にわたりなんと力に満ちていることでしょう。あなたのご威光は天でたたえられています。幼子たち乳飲み子たちの口を通してあなたは御力を打ち立てられました。あなたに敵対する者に応えるため復讐する敵を鎮めるために。」

そして、次に「あらゆる国の人々を弟子としなさい」と言われます。同胞の民ではなく、あらゆる国民です。イエス様はそれまで弟子たちに、「イスラエルの家の失われた羊たちのところに行きなさい。(マタイ 10:6)」と言われました。けれども、ユダヤ人指導者らがイエス様をメシアとして拒んだことによって、異邦人に福音を語るようにされています。けれども、これは初めから意図しておられたことで、アブラハムに対して、「あなたによって、あらゆる部族が祝福を受ける」と言われていたのです。ですから、私たちは絶えず、自分の仲間、自分の部族から出て、他の部族、他の仲間に福音を届けるのです。ですから、世界宣教の幻をどの教会も持っていることが、神の御心です。また、私たちがここ西日暮里にいることも、その一環であります。

そして、弟子を造るのに、三つの事が、出て行って、バプテスマを受け、すべてイエス様が命じられたことを守るように教えます。これを私たちは活動として行っています、出て行くとは、福音を知らない人に伝える事。バプテスマは、弟子として生きるための第一歩です。そして教えること、このようにして教え、またそれを守り行なうことができるように励まし合うのです。

そして最後の約束があります。「見よ。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいます。」宣教の働きに関わる時の最も大きな祝福は、共にいるということです。私たちが行なうことではなく、主が私たちを通して行われることです。ですから、私たちは聖霊を求めなければいけません。聖霊の力なしには、決して主の命令を全うすることはできないからです。

そしてこれが「世の終わり」まで、そうしてくださいと言われます。イエス様がオリーブ山で言われましたね、「御国のこの福音は全世界に宣べ伝えられて、すべての民族に証しされ、それから終わりが来ます。(24:14)」福音が全世界に宣べ伝えられて、それで終わりが来ます。私たちはその世界に広がる神の宣教のビジョンの中の一部にされています。そして終わりが来るまで、つまり主が来られるまで、このことを行っていきます。パウロが、聖餐にあずかる時に、主の死を、主が来られるまで告げ知らせるのだと言いました。

そして使徒たちは聖霊を受けて、世界に福音を伝えますが、私たちはその前に、あと三つの福音書を読んでいきます！